

共同研究 ● 現代「手芸」文化に関する研究

「手芸」は誰もが知っている言葉でありながら、人によって想起するものが異なる。女性の針仕事や世界各地の民族的な手仕事、贅沢な布の装飾品など、いったい私たちは何を「手芸」と呼び、みつめているのか、研究会ではしばしば議論してきた。本研究は、多分野・多領域の研究者による共同研究のなかで、現代社会の様々な場に散見される手芸を拾い上げ、通文化史的にその意義を提示することを目的としている。

被災地の手芸活動

「手芸とは何か」を現代において問うなかで、昨年度の中心的なトピックは、東日本大震災の「被災地における手芸」を考えていくことであった。金谷美和（国立民族学博物館、以下、民博）は「被災地の手芸——暇つぶし」、『供養』、『ギフト』と『仕事』というテーマで被災地における手仕事グループについての民族誌的研究事例について報告を行った。震災後の被災地では仮設住宅などで手芸活動が行われてきた。それは被災者の癒しや交流となり、また無為な時間をやり過ごすことや、津波で亡くなった方々の供養、また復興支援という意味を持つものであった。時間の経過とともにこうした活動から経済活動を伴う「仕事」として手芸製作が行われるようにもなった。被災地の手芸製作が、自己の癒しや供養から「仕事」へと変化する際、手芸に与えられてきた趣味性や自家消費という位置づけと齟齬が生じる。では商品化、産業化した手芸は「手芸」ではないのかといえばそうではなく、やはり布ぞうりや編物、刺繍などは商品としても手芸品と呼ばれる。その時、手芸が趣味的であるという既存の価値観によって商品の価格を下げてしまう可能性があることが、金谷の報告から浮き彫りになった。

杉本星子（京都文教大学）による『「つくらない」がつなぐ——被災地で「手芸」を考える』の報告では、被災地の地域コミュニティが崩壊するなかで手仕事を持つ「つなぐ」機能が注目された。「まけないぞう」（ゾウの形の壁掛けタオル）製作は阪神淡路大震災から新潟中越地震・中越沖地震、そして東日本大震災へ、被災地から被災地へと復興支援リレーが行われ、それは被災者しか「つくらない」もの、そして彼らの日常が回復されていく時卒業するものとなった。また東松島市の「おのくん」と名付けられたソックモンキー（靴下で作るサルの人形）も、被災者とサポーターをつなぐ役目を果たしている。製作した被災者たちは「お母さん」と呼ばれ、彼女たちしか「つくらない」おのくんを、サポーターが「里親」として迎える。おのくんを介して支援が行われていく。こうした手芸による復興支援の基層には女性の手芸文化があり、手芸品は技術的には誰でも作れるものでありながら、限られた人しか「つくらない（禁止）」ことにより被災地の記憶メディアとなり、サポーターにそれが共有されていく。作り手を限定することにより手芸品に特別な意味が付与され、被災者と支援者の間に生じるある種の上下関係を無効化するシス

テムとなる可能性が杉本によって指摘された。

さらに本共同研究は、2017年2月に南三陸へ赴き被災地の手芸についての研究会を行った。これは被災地である南三陸沿岸部で500回以上の手仕事講座実績のある、NPO法人ウィメンズアイの活動拠点のなかの「ひころの里シルク館」および「さとうみファーム」で議論することにより、被災地の手芸活動について認識を深める機会となった。6年の間に被災地において様々な手芸活動が生まれ、変化を遂げ、そして消えていくものもあった。多くのモノが失われた被災地で手芸というものづくりが意味のあるものとして機能してきたことと、その意義が今後の研究で明らかにできるものと考えている。

手芸家の視点

手芸をする人々の語りに耳を傾けることから様々な現代の手芸の在り方がみえてくる。研究会では手芸家の石井康子をゲストスピーカーとして「現代日本の手芸の諸相——手芸家の視点から」という話をうかがった。石井は子どもの頃から様々な手芸を経験し、20歳代から本格的にパッチワークキルトを学び、その後キルト講師として活動、現在は加賀ゆびぬき（絹糸で模様を刺す手作りのゆびぬき）普及のため「加賀ゆびぬき結の会」を主宰している。

戦後、家庭内洋裁が流行し、それが次第に既製服消費へと移行した時期、布地メーカーが販路を模索するなかでパッチワークキルトの流行が始まった。パッチワーク用品専門の企業が登場し、キルトショップという小売店も現れた。ショップ経営やキルト作家兼講師という仕事に多くの女性たちが関わってきた。趣味として始めたキルトで起業し「家庭との両立」が理想とされ、キルトで得る収入は多くなくとも、生きがいや自己表現などの魅力的な言葉は手芸をする女性たちにとって大切なものであった。また、キルトブームが下火になる契機も女性の生き方に関わっている。女性の社会進出、パート労働、高齢者介護などによって、余暇が減少し手芸に専心することが難しい今日、キルトの愛好家は高齢化し、手芸業界では若い世代に向けた手芸が開発され始めている。趣味としての手芸は多様化し、時間やスキルがない人に向けた「簡単手芸」が流行している。また雑誌からネットメディアへと情報取得方法も広がり、「お教室」に通わず手芸を学べるようになった。

手芸の在り方は女性たちの生きる時代を反映する。すなわち時代や条件の変化は手芸なるものの変化を促し、その時代に合わせた手芸が創出されていく。手芸品を販売することも、手芸の著作権も、手芸家としての自立も今日的課題であり、それらはこの時代が生み出した新しい手芸をめぐる社会問題であることがみえてきた。



本共同研究が研究会を行った際に見学した施設。仙台藩養蚕発祥の地として栄えた入谷地区にあるシルク館にて行われた繭細工体験（2017年3月2日、南三陸町、上羽陽子撮影）。

手芸とは何かを論じることの意味

このように現代の手芸は、その様態や概念を変化させてきた。また同時に手芸とその担い手との関係も時代によって変化してきた。誰が、どんな素材を使用し、どのようにものづくりをするのか、丁寧な調査が必要となっている。注意したいのは「手芸」という概念も、その様態も、周囲との関係性も同時進行で変化している点である。それらがそれぞれに曖昧であり、しかしその曖昧さも含めて広く共有されている点が手芸の面白さであろう。また、曖昧であるがゆえに、次々と新しい手芸が生み出される余地があり、新しい手芸は「手芸」の枠を次々と組み替えていく。それもまた「手芸」の魅力であるとともに、私たちの日常に手芸が生き続けている根拠でもある。

では、このつかみどころのない「手芸」にどのようにアプローチするのが課題となる。この研究プロジェクトでは、現代社会のなかに息づく手芸の諸相をみるため、トークセッションを始めた。1つのテーマとその周辺にあるキーワードを組み合わせ、メンバー数名が各自1つのトピックを提供し、そこから全員で議論を展開する。第1回のセッションのテーマは「技術」、キーワードは「つくる」であった。「手芸」をめぐる「つくる×技術」の議論は、精神論から技術不要論、性別特性論まで、現在の「手芸」観を考える1つの基盤となるといえる。

中谷文美（岡山大学）は、手芸をモチーフとしたアート活動を続けるアーティスト集団「押忍！手芸部」に触発され、手芸経験がないにも関わらず衝動的に軍手の作品を作った自身の息子を1つの事例に、「手芸」的なものの本質には作りたいた衝動を形にしていく敷居の低さがあるのではないかとする。

金谷は自身が関わる丹後藤織り保存会の活動を取り上げ、そこでの技術伝承は必ずしも作品に結実しないことを指摘する。活動はモノを生み出す文化環境への理解が中心であり、技術が重視されない点に手芸との共通点を見出す。上羽陽子（民博）は、NGOなどによる女性支援としての商品化には消極的だが自身のために緻密な刺繍をするインドのラバーリーの女性たちの姿勢に「手芸」的なものを読み取る。以上のような創造の欲望にこたえる日常的な技術、完成を目的としない創造のプロセス、売らないことで守る自己の創造という3つの手芸の在り方から、ものづくりの課題、つまり産業化社会における手仕事の意味が浮き彫りになった。

「手芸的なもの」は手芸の在り方を規定し、「手芸」は手芸的なものを生み出す。この相互関係は様々な時代や地域で、時に文化横断的に構築され、手芸なるものの総体を作り出しているのではないだろうか。豊かに横溢する手芸文化をみつ「手芸とは何か」を議論する時、学問とはなんと不自由で、学者とはなんと不器用なものかと考えさせられる。しかし「手芸とは何か」という議論に踏み止まることでみえてくるものもある。人がモノを作り、その何かを「手芸」と名指すのであれば、そこに「手芸」と名指されることの意味がきつとあるはずである。

やまさき あきこ

奈良女子大学生生活環境学部准教授。専門は視覚文化論、ジェンダー研究。主な著書に『近代日本の「手芸」とジェンダー』（世織書房 2005年）、「ひとはなぜ乳房を求めるのか—危機の時代のジェンダー表象」（共著 青弓社 2011年）など。「現代日本におけるテキスタイル・アート」『美術運動史研究会ニュース』を連載中。